

2.5 軽度失語症者の 30 分談話の理解実験

はじめに

2.2 節において、失語症者らに無修正のラジオニュースを提示し、その理解力を検討した。2.3 節においては、ニュース 1 題と 4 題のニュース計約 6 分を連続して聞かせた場合の理解力を検討した。ところで、日常では、テレビ等を含めて談話や対話の聴取時間が 1、2 時間に及ぶことも多い。しかし、このような長時間にわたる談話の理解に関しては、失語症学ではもちろん、健常者を対象とした認知心理学でもまったく検討されていない。現在まで、談話研究に使われた素材としては、2.3 節の 4 題連続ニュース約 6 分が最も長い素材と思われる。

筆者の担当するある失語症者は、SLTA 失語症検査の口頭命令の理解に全問正答したが、テレビドラマの理解に困難を感じると訴えた。そこで、失語症者らの日常における理解力をより現実に則して明らかにするため、長時間におよぶ談話の理解力を検討することにした。

現在、我々が日常接している長時間談話はマスメディアで流されるものが多い。我々のアンケートでも失語症者は平均 1.5 時間テレビに接していた。マスメディアでは各種の形態の談話が放送されるが、その中でニュース番組と、ある話者による講演とが最も相反する特徴をもつものと考えた。前者は無関係な事件の報告集であり、後者はあるテーマに対する 1 人の話者のまとまった談話である。映画やドラマなどは、これらの中間であり、各場面の談話や事件などを常識と推理力で統合しながら理解するものであろう。クイズ番組やドキュメント番組等は、あるテーマ内での各種の談話と複数人の対話の集合と考えられる。

さて、2.3 節のように健常者年代一致群でも連続するニュースを聞く

と、記銘力や集中力は低下してくる傾向が見られた。聴取時間が長くなると、興味のある所のみを選択的に聞くことが予想される。各種の無関係な事件の報道からなるニュース番組などは、聴取者の好みによる取捨選択の関与が大きいと思われる。従って、ニュース番組を用いて長時間の談話の理解を検討する事は、非現実的と判断した。ドラマやドキュメント番組などの場合は、不確定要素の介入が多く、実験の素材としては適用が難しいと思われた。

他方、一人の話者によるある特定のテーマに関する講演は、ある流れにそって、興味をそそるエピソードやユーモアなどが聴者の興味を持続するべく、織り交ぜられて話される。このため、長時間にわたっても聴取者の興味は持続し、疲れも少ないと考えられる。一般向けの内容であれば、推理や特殊な知識もさほど要求しないであろう。日常、我々が接する長時間談話もこれに近いと考えた。

以上より、マスメディアで放送されるある話者による講演を日常の長時間談話の一つの典型と考え、これを本節の実験で使用する素材とした。その談話の長さは、約 30 分とした。これは 30 分を 4 倍すれば、2 時間番組などの理解の推測が出来る可能性があるからである。また、同種の講演から得た 6 分間の談話も別に用意し、この談話の理解も合わせて検討した。これは、2.3 節の 4 つのニュースの連続が計 6 分であり、その結果と比較ができること、6 分を 5 倍すれば 30 分となり、6 分談話から 30 分談話へ成績変化が明らかにできるなどの理由による。また、30 分談話を 3 つに分割し、それらを相互に入れ替えて提示することにした。こうすることで、2.3 節で得られた談話の系列位置の曲線が 30 分談話でも得ることができるからである。

そして、軽度失語症者群、および健常者 2 群（若年群と年代一致群）

に 6 分談話と 30 分談話を提示し、以下のことを検討した：(1). 6 分談話と 30 分談話の各群の成績、(2). 6 分談話と 30 分談話の成績の差、(3) 30 分談話の中での、先頭、中間、最後の位置の違いによる成績の変化。(4) 質問のカテゴリー別（内容、理由、数値など）と、重要度別（主要と末梢的項目）の得点差。

方法

1. 教材

- 1) 談話の選択基準は、書き言葉でないこと（小説の音読などは、耳で聞くにしては情報が多すぎると思われる）、一般人を対象に一人の話者があるテーマで約 30 分話すものとした。その結果、NHK 第 1 放送「人生読本」が最適と判断し、1990 年 9 月から 11 月にかけて同番組を 20 本録音した。
- 2) このなかから、談話の内容が話者の実体験で、抽象的でなく、低頻度語や、業界用語をあまり含まず、エピソードに富み興味が持続すること、以上の基準から、30 分談話として [横浜寿町診療日記] を、6 分談話として [孤児たちとともに] を選んだ。後者は 10 分間の談話から、6 分間分を抜粋したものである（表 3）。
- 3) 以上の放送は、話者本人の独白のため構音が不明瞭なところがあった。そのため、全題を筆記した後、いい誤り題分、自己訂正題分、感嘆詞等を修正し、構音不明瞭な個所は文脈から推測した単語を当てた。2, 3 の低頻度語、業界用語等はより一般的なものに改めた。
- 4) 30 分談話は、テーマは同じだが、3 日間（3 題）に分けて放送される。各日の内容は独立している。そのため、この談話を 10 分間ごとに（A, B, C 題）に分類した。

(表 3 参照)

- 5) 両談話も冒頭にそれぞれ約 1 分と 30 秒の自己紹介文を置いた。これは実際の放送時のアナウンサーの紹介文を、若干編成し直したものである。談話の前置きとして、本人の自己紹介の形で話すようにした。
- 6) 以上を放送業務経験のある 47 才の女性が、元放送とほぼ同じプロンデューで録音し直した。早さは、元放送の ± 15 秒以内とした。以上の談話の長さは、6 分談話 (題; 孤児達とともに) が前置き 53 秒、本題 4 分 47 秒、計 5 分 40 秒。30 分談話 (題; 横浜寿町診療日記) が前置き 1 分 10 秒、A 題 9 分 39 秒、B 題 9 分 39 秒、C 題 9 分 25 秒計 30 分 13 秒である。このほか、練習用談話 (2 分 25 秒) を用意した。

2. 設問

- 1) 30 分談話は、各題 8 問計 24 問、6 分談話も 8 問を設けた。質問は以下の 3 カテゴリーで構成した。「内容」は法人名、地名、物件、行事を問う。「理由」は因果関係や説明等を問う。「数値」は月日、金額、等を問う。
- 2) それぞれのカテゴリーは主要と抹梢に別けた。これは、10 人の健常者に各題を聞かせ、各題ごとに思い出したエピソードを箇条書きで書字させた。それらの再生文中、7/10 人以上に出現した文節、連文節などを主要問題の候補とした。末梢は 3/10 人以下しか出てこなかったものの中から選んだ。質問数は各題共通で、内容問題は主要と抹梢が各 2 問とした。理由と数値は各 1 問とした。
- 3) 解答は四者択一とし、正答は談話中に使われたもので、他は文脈的に妥当だが、正答とは明確に異なるものとした。数値の選択肢は正答、正答 \times 約 0.5 の数値、正答 \times 約 1.5 の数値、及び談話中に出た他の数値 1 個を基本とした。

- 4) 質問の呈示は 2.3 節と同様、一つの質問と四選択肢を B5 用紙横 1 枚に横書き、各題の文脈にそって質問した。正答は一点で 30 分談話は 3 題合計 24 点満点、6 分談話は 8 点満点とした。

3. 手続き

- 1) すべての検査は静かな題屋で、個別に行なった。談話以外の検査は通常と同じやり方をした。
- 2) 談話検査はまず、検査の目的を話した後、「後で質問しますからよく覚えておいて下さい」と言い練習用談話をカセットデッキから聴かせた。聴取後、検者が質問紙を見せながら質問と選択肢を音読し、20 秒以内に指示させた。これによって施行法の理解と音量の適切さを確認したあと本番に移った。反応の正否は教えなかった。
- 3) 30 分談話は疲労感の蓄積を防ぐため、1 題目と 2 題目の終了後に 3 分間の休憩を挟んだ。休憩中は、検者と一緒に首の前後回転、肩の上げ下げなどの規定の運動をした。
- 4) 30 分談話の場合、談話内各題の取り違えを防ぐため、各題の聴取の前に「次は 2 番目の話しです」等の指示を与えた。質問に際しては各題の質問の前に「では 2 番目の話についてお尋ねします」といって質問に移った。
- 5) 30 分談話の質問中は疲労感の蓄積を防ぐため、各題質問終了後 1 分間の休憩を挟んだ。その間は、首の上げ下げ等の規定の運動を検者とともに行った。6 分談話の場合もほぼ同じやり方をした。ただし、聴取中や質問中の休憩時間は、設けなかった。
- 6) 30 分談話中の ABC3 題の提示順序はランダムとした。紹介文の後、順に「先頭」、「中間」、「最後」としてデータをまとめ、正答の位置効果を見た。

7) 検査は 3 回に分け、この間、SLTA 口頭命令、書字命令、記銘力検査、6 分談話、コース立方体検査、30 分談話の理解検査を行なった。

4. 設問の信頼性

1) 10 人の健常者に質問と 4 選択肢のみをみせて正答を予想させ、偶然当たる確率を見た。4/10 人以上正答した問題は、選択肢の項目を変えた。これを 3 回被検者を変えて繰返し、全問 3/10 (Chance Level) 以下の正答とした。

2) 計 4 題の談話を各題ごとに 10 人の健常者に聞かせ、そのつど理解検査をした。各題の正答率は 6 分談話 91%。30 分談話 A 題 88%、B 題 88%、C 題 91%であった。以上から各話とも難易度はほとんど等しいと判断した。

5. 対象

健常者群 聴力や視力等に問題のない健常者と失語症者で 3 群よりなる。

1) 健常者若年群 (以下若年群) : 10 名。平均 19.5 才。

2) 健常者年代一致群 (以下年代群) : 失語症者全体と年代がほぼ一致する健常者群 7 名。平均 49.3 才。

3) 失語群 : 8 名。平均 53.6 才。全例初回発作で発症後 2.5 カ月以上経過した意識清明な右利き、左半球損傷。口頭命令に従うが 6 点以上 (平均 7.5 点) の軽度失語症者。

結果

各群の正答率を図 5 に示した。成績は 6 分談話、30 分談話ともに、健常者若年群、健常者年代一致群、軽度失語群の順となった。3 群の 6 分談話の成績を一元配置分散分析にかけた。その結果、 $(F(2, 22) = 7.08,$

$P < .01$)で有意な差があった。Post Tukey 検定では、健常者若年群と軽度失語群の間に有意な差があった ($P < .01$)。健常者年代一致群と軽度失語群の間には、有意な差は見られなかった。

各群ごとに6分談話の得点と、30分談話の平均得点との差を対応のあるt検定(市原、1990)で検討した。有意な差はどの群からも検出できなかった。次に、各群の6分談話の得点を100%として、30分談話の得点がどの程度低下しているかをみた。その結果、30分談話の成績は若年群が95%、年代一致群が96%、失語群が94%でほとんど低下していなかった。

30分談話の成績に関して、各群を被験者間変数とし、談話内の3つの話の「位置」(先頭、中間、最後)を被験者内変数として、繰り返し2元配置分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F(2, 66) = 13.5, P < .01$)。Post Tukey 検定では、健常者若年群と軽度失語群の間に有意な差があった ($P < .01$)。健常者年代一致群と軽度失語群の間には、有意な差は見られなかった。

30分談話の健常者若年群と年代一致群の成績では、「最後」が良好な傾向があった。失語群では、そのような傾向はなかった(図5)。

(図5参照)

各群における6分談話と30分談話(平均)のカテゴリー別質問の正答率を、図6にしめした。6分談話では、健常者年代一致群と軽度失語群の正答率のパターンはほとんど同一であった。一方、健常者若年群はこれら2群と異なり、「DC;末梢内容」が比較的良好であった。

30分談話では健常者2群は似たパターンとなった。「MC;主要内容」と「MR;主要理由」は保たれ、「DC;末梢内容」と「DR;末梢理由」が低下を見せた。しかし、失語群では、「MR;主要理由」が不良となり、健常者2

群とは異なったパターンを見せた。

(図 6 参照)

失語群における各変数値同士の相関係数では、有意な相関は年齢と 6 分談話、および発症後月数と 30 分談話のみにみられた。

考察

当初、2.3 節の連続ニュースの結果から、30 分という長時間では、より成績は低下することも予想された。しかし、予想とはまったく異なり、健常者 2 群のみならず、失語群でも 6 分談話から 30 分談話への理解の低下率は約 5 %のみであった。

軽度失語群は、6 分談話と 30 分談話において健常者若年群より有意に劣っていた。しかし、健常者年代一致群との間には有意な差はなく、両談話をよく理解できていた。

以上より、本節の検討項目の(1)と(2)については、失語症者は単独ニュースや連続するニュースよりも、一人の話者の談話をよく理解していること、さらにその談話が 30 分という長時間におよんでも良く理解できることが示唆された。

検討項目の(3)については、健常者 2 群は「最後」が良好な傾向があった。健常者年代一致群は 2.3 の連続するニュースでは、「最後低下型」を示したが、今回は健常者若年群と同様に「最後良好型」の傾向を示した。しかし、失語群ではこのような「最後」良好傾向は見られなかった。これは、2.3 節の連続ニュースの理解で見られたと同様の要素が働いたものと思われる。

失語群では 6 分談話のカテゴリー別質問の正答率が、健常者年代一致群と極めてよく似ていた。これは理解構造のヒエラルキーが健常者年代

一致群と同様に維持され、6分談話を聴取していたことを示そう。一方、健常者若年群はこれら2群とは異なり、「末梢内容」などもよく理解していた。これは、健常者若年群にとって6分談話が容易な課題であり、そのため“主要”と“末梢”の差がでなかったものと考えられる。

30分談話になると、健常者2群は互いに近似したパターンを示した。すなわち、“主要”が“末梢”よりも保たれるというパターンが明瞭となった。一方、軽度失語群では、「主要理由」が落ち込むなど、健常者2群は異った傾向を見せた。これは2.3節の連続するニュースの理解と同様であった。30分談話に対する理解構造のヒエラルキーが、ランダム化してきていることを伺わせる。

各群とも数値問題は比較的良好であった。これは談話の長さに比較すると、数値の単位時間当たりの出現頻度は少ない結果となり、その分把握しやすかったものと思われた。

失語群における相関係数で、有意な相関は年齢と6分談話、および発症後月数と30分談話にみられた。しかし例えば、年齢と30分談話ではなかったことから、結果の連続性がなく、考察は保留した。

次節において、本節の結果と、2.2節と2.3節の実験結果を統合して考察する。

まとめ

30分という長時間談話の理解は、健常者2群のみならず失語群でも良好だった。また、6分談話から30分談話への理解の低下率は各群とも約5%のみであった。失語症者は単独ニュースや連続するニュースよりも、一人の話者の談話をよく理解していること、さらにその談話が30分という長時間におよんでも良く理解できることが示唆された。健常者2群は

30分談話の「最後」が良好な傾向があったが、失語群ではその傾向は見られなかった。